

インドネシアの木材加工産業における原木調達の動向 —ジャワおよびカリマンタンの事例—

○岩永青史(筑大生環系・学振 PD)・増田美砂(筑大生環系)

背景および目的

インドネシアのカリマンタンやスマトラ(以下、外島)の天然林地域では、輸出仕向けの合板、紙・パルプ工場が発達してきた。しかし現在では違法伐採、火災によって森林面積は減少の一途を辿っている。一方、ジャワでは林業公社の管理・経営する人工林が大部分を占め、外島産やジャワ産の原木を用いた国内仕向けの製材工場が発達していた。しかしジャワの人工林も地方分権化と時期を同じくして、違法伐採と開墾により著しい打撃を受けた。これらの状況を鑑みるに、輸出仕向けの外島の工場および国内仕向けのジャワの工場は、ともに資源の確保に困難を来し始めていると考えられる。このように国有林、特に天然林が減少する一方で、私有林の面積は1999年から2004年にかけて、外島で約9万ha減少したが、ジャワでは39万ha増加した。

本研究では、代替供給地としての可能性がある私有林面積が増加しているジャワと、産業造林が展開され、そこからの代替的供給の可能性が考えられる外島において、原木の直接の消費者である木材加工工場の動向を比較し、供給源の推移を明らかにした。外島に関しては、カリマンタンを事例とした。

調査方法

統計局に登録されている従業員100名以上の工場に対し、電話インタビューを試みた。聞き取り内容は工場の設立時からの原木調達先の変遷である。ジャワにおいては、調査対象195工場のうち、3工場は木材以外を原料とし、33工場は電話が不通あるいはすでに廃業していた。残り159工場のうち、95工場から回答を得ることができた。カリマンタンにおいては、調査対象38工場のうち、18工場は電話が不通あるいはすでに廃業していた。残り20工場のうち、16工場から回答を得ることができた。調査は、2009年10月~2010年1月および2011年12月に実施した。

結果

- 1) ジャワにおいては、インドネシアの木材生産量の大部分を占めてきた伐採企業材(外島の天然林材)を使用する工場が減少していることが明らかになった。この材の内訳をみると、ムルバウの使用の増加がみられたが、それ以上に、これまで主に使用されていたメランティの使用が大幅に減少していることが確認できた。私有林材は最も多くの工場で使用されており、全工場の約4割にのぼった。
- 2) カリマンタンにおいては、聞き取りができた16工場の平均操業期間は約29年と、ジャワの約20年より長く、平均従業員数も1187人で、ジャワの387人を大きく上回った。16工場中、7工場が原料不足に陥っており、稼働率が著しく低下している状況であること、そして、13工場がメランティを主原料としていたことが明らかになった。15工場はこれまで原木調達先を変更せずに外島の天然林材を使い続けており、残り1工場だけが外島の天然林から産業造林へと調達先を変更していた。

謝辞:本研究は日本学術振興会「特別研究員奨励費(23・161)」によって実施した。調査許可取得に際しては、ボゴール農科大学のLilik Budi Prasetyo氏にカウンタパートとなっていたいただいた。

(連絡先:岩永青史 iwanagasage@yahoo.co.jp)